

# 病児保育奮闘記

(5)

子どもサポート H&K  
大石 仁美

今回は、数年前の、強烈に印象に残った子どものこととお話ししたいと思います。

## 赤ちゃんの不思議な力♥

あかちゃんをお母さんからお預かりした時点で、不思議なことに赤ちゃんは、「今日はこの人が私のお世話役なんだ」と思い込むようです。お母さんから直接引き渡されたということが大きなポイントのようで、他の人が後から関わろうとしても、しばらくは、最初の人に抱き付いて離れようとしません。その人が好きなわけではなく、本能的なものだろうと思います。そのうち、おむつを替えてくれたり、ミルクを飲ませてくれたりと、実際のお世話を通して、他の人にも心を開いていきます。いかに心地よく抱っこしてくれたか、優しく「よしよし、良い子だ」と声掛けしてくれたかが重要で、少しでも大人が「うるさい子」などと思おうものなら、さらに激しく泣き続けます。まるで大人を試しているかのようです。赤ちゃんとの最初の出会いは、今も変わらずこのような状況です。さて、この、試しかたが強烈で、食い入るように大人を観察し、大人の出方をじっと

見ていたパワフルで 感性の鋭い赤ちゃんがいました

A子ちゃんがはじめてやってきたのは、10か月になったばかりの頃でした。人見知りの激しい月齢とはいえ、大声で泣き叫び誰も寄せ付けません。どうやら知らないところに預けられたことを怒っているようなのです。こういう時は、かまうとかえって気が高ぶるので、しばらく様子を見守るか、担当を交代して気分を変えることにしています。

交代して、A子ちゃんの部屋に入り、記録に目を通してしていると、背後に鋭い視線を感じました。“見られている！”振り返るとA子ちゃんと目があいました。A子ちゃんはじっとみているのです。私の一举一動を。目があってもそらすことなく、食い入るように見つめているので、見られている方がどぎまぎしてしまいます。そしてしばらく見つめた後泣くのです。張り裂けんばかりの大声で。泣いたらこの人はどんな反応をするのだろうか。自分の不安を本当に受け止めてくれるのだろうか。信頼できるのだろうか。本能的に、自分を守ってくれるかどうか見極めようとしているとし

か思えません。まさに私は試されているのです。

そう感じ取った私は、「よしよし、良い子だね。かわいいねえ。大好きだよ。」そういうおもいを込めて見つめ返してみました。すると不思議に泣き止むのです。少しでも「困った子ねえ。」と思うものなら、それを見透かすように泣き声は爆音に近づきます。抱き上げている大人の目をそらさず見つめ続け、泣くタイミングを伺うA子ちゃん。

“参りました。”

その後何度か私自身の心を整えて、優しい気持ちで語りかけながら抱っこしているうちに、いつしか腕の中ですやすや眠ってくれました。A子ちゃんは一日かかってやっと私を受け入れてくれたようでした。恐るべし、赤ちゃん。

赤ちゃんは、すごい力を持っているんだ、ということをおもった体験でした。

## 不登園？になったMちゃん

Mちゃんは4歳の女の子です。このところ毎朝のように腹痛を訴え、登園をしぶるそうです。お母さんがお熱を測ると、実際、微熱があるので、園を休ませますが、一緒に家にいると、元気そのもの。お母さんも、そんなに仕事を休んでばかりもいられず、病児保育室へ行ってねということになったようです。

お母さんがおっしゃるには、当初は繊細な子なので、言いたいことが言えず、ストレスがたまっているように見え、少しゆっくりさせようと思っていたのですが、話を聞いているとどうも園でいじめにあっているようで、保育園の先生とも相談中だとか。元気のよいB子ちゃんと諍いがあったのは事実で、先生は園で見守りながら指導をしていきたいと言われたそうですが、陰険な感じのB子ちゃんを知っているお母さんとしては、どうしたものか、先生にお任せすることにも不安は尽きないようでした。

一般に、子どもの問題に大人はあまり介入しな

いほうがいいし、先生の指導にも口を挟まない方がいいと思うのですが、子どもが登園してくれないことには、どうしようもありません。仕事との板挟みでほとんど困っているお母さんでした。

以前から、時々利用してくれているMちゃんを見ている限り、友達に意地悪をされて我慢している子とは思えません。自意識が強く、やられたらやり返すぐらいのことはしていると思えるタイプの子なのです。直観的に原因は違うところにあるのではと感じましたので、「もしよかったら、週2回程度なら一時保育で来て頂いても良いですよ。Mちゃんの心がほぐれたら案外解決策が見つかるかもしれません」と提案したら、「それではどうぞよろしくお願いします。」ということになりました。

週2回、病児保育室にやってくることになったMちゃん。さて、どんなふうに接していこうか、スタッフ3人で話し合いました。

まずMちゃんの様子ですが、4歳というのにジージ（小川）の膝に乗ってきて、ベタベタ抱き付いて離れません。その甘え方は少々度を超えているのではというのが共通見解。小川の話では午睡のとき添い寝をすると、顔を触りにきたり、手を握りにきたり、やたら自分の体に触りに来るので、気持ちが悪いほどだとか。う～ん これはどういうことなのか？

ジージ（男性）に甘えるということは、もしかしたらお父さんの代わり？

お父さんはどんな人だろう。スタッフは誰もお父さんに会ったことがないのでした。

怖い人？いや、怖かったら男性嫌いになり、こんなにベタベタしないでしょう。優しい人？たぶん。だけど甘えられない。何故かわからないけど。

いろいろ想像を巡らせて、一度お会いしなければと思っていた矢先、お父さんがお迎えにおみえになったのです。観察のチャンス到来！

玄関にスラリ長身の男性が立っていました。

Mちゃんは嬉しそうに駆け寄ると、「ねえねえ、私の絵、二階に飾ってもらったの。見て！上がって見て！」

「早くしなさい！弟のお迎えに行かなきゃいけないから。」と取り合いません。Mちゃんは仕方なくあきらめて靴を履きました。

2分、いや1分、お父さんが靴を脱いで子どもの絵を見に行ってくれていたら・・・彼女はよほど嬉しいだろうに。そう思ったことでした。

次の日、私たちはMちゃんを思い切り甘やかしてみようという方針をたてました。何をしても叱らず、甘やかすだけ甘やかしてみたら、何かが変わるかもしれない、甘え足りない分を補ったら本音がポロリと出るかもしれない。そう思ったのです。担当は、あえてジージーではなくお姉さん保育士のTさんに任せました。

Tさんが担当になってから、その我儘ぶりはあきれほどエスカレートしていきました。

まず、「Mはおねえちゃんのことくらい」そして手を大きく広げて「ジージーはこのくらい好き！でもお姉ちゃんはこのくらい」と両手を小さくすぼめて、わざと意地悪く担当者の気持ちを逆なでしてみせるのです。

五味太郎の絵本「さんぽのしるし」をまねて自分も「しるし」を作ると言って **Mのしるし**の旗を作り部屋の壁に貼りました。



さんぽのしるし



Mのしるし

そして「この部屋はMの部屋！私はこの女王さま！」と宣言したのです。

Tさんからの報告を2~3挙げてみると、

「馬になれ！」「もっと速く走れ！」といわれ、背中にまたがり、部屋中何度も回らされた。

「あっち向いとき！」と手で顔を挟んで横に向け、そのまま動かなくと命じられた。動かすと「ダメ！」と大声で制止され、そのせいで首が凝って痛い。お片付け一緒にしようと言かけると、「イヤッ！おねえちゃんがしい！」と怒る。等々。

それでもTさんが出勤する日は、待ちどおしそうに玄関ばかり見ているMちゃんです。

お絵かきや、お買い物のごっこ等の遊びをするなかで、お家での様子がよく見えてきました。そんな頃、事件がおきました。

女王様は小さな部屋いっぱい使って積み木でお城を作っていました。それは、塔がたくさんある立派なお城でした。お城がほぼ完成した時、部屋に入ってきたお姉さん保育士Tさんの足が触れて、一部が崩れてしまったのです。彼女の痛癢をおこした大声が、泣声を混じて響き渡りました。

「わざとやったんじゃないのよ。崩れたらまた直せばいいの。一緒に遊んでくれているお姉さんにその態度はどうかと思うよ。」

みかねて、私が間に入らざるを得なくなりました。「お家ではどうなの？ Mちゃんがせっかく作ったものを弟が壊すことないの？」「ある」「その時どうするの？」「お姉さんだから我慢しなさいって言われる。腹が立つ！ あんな弟なんかいないほうがいい。」「弟なんか死ね！！」

おおっ！ 彼女は言っはならない言葉を思わず口にしてしまったのでした。そして、しばらく泣きじゃくった後、落ち着いて何事もなかったように帰っていきました。

Mちゃんはライバルの弟の出現で、親の愛情が弟の方に傾いてしまったと感じ、自己存在の基盤が揺れ、不安、悲しみ、怒りなどの感情が鬱積されていたのでしょう。今回のことがきっかけで爆発したのですから、ガス抜きが出来て本当に良かったと思いました。

後日、私はご両親と面談することにしました。弟さんとMちゃんの家での様子をお聞きしたあと「同じことをしていても、お姉ちゃんは叱り、弟さんは何でも許されるということはありませんか?」と尋ねました。ご両親ともうなずいておられましたので、「親の判断で、悪いと思うことには年齢に関係なく同じように叱って下さい。」とお願いしました。「お母さんのおっしゃるとおり、確かに感受性の強いお子さんなので、姉弟間で親の対応に差があると、大人が思っている以上に深く傷つくようです。そこで特にお父さん、一緒に遊んであげてください。子どもの話に耳を傾けてあげてください。」

お父さんは「女の子なので、どう接して良いのか分からなかったもので。しかられちゃった。」と苦笑いしながら聞いてくれました。お母さんは、イライラして叱ってばかりいたようです。とおっしゃって、家に帰ってから子どもに謝られたそうです。Mちゃんはその後スーッと園に戻って行きました。

子どもは、親に愛されている、自分の後ろには親という強い味方がいて自分を守ってくれるという確証があれば、それが自信になり、少々辛いことや困難なことにも立ち向かっていけるのだということを改めて教えてくれたケースでした。

その後、父と娘が仲良く並んで自転車を走らせ、お稽古ごとの送迎をしているのに出会うことがあ

りました。小学校の卒業式のあとには、お母さんと二人そろって挨拶に見えました。いまやMちゃん、立派な中学生です。



## ゆっくり ゆっくり白雪姫 ♡

Sちゃんはまだすぐ一歳になる女の子です。10カ月から保育園に預けられ、その後、病児保育室のお得意様になりました。お父さんが小さな赤ん坊のように横抱き抱っこで連れてこられ、色白でぽっやりしたお顔の、愛くるしいお人形のようなです。「お父さん、可愛いですねえ。お姫様みたい。」  
「はい！ かわいいです。うちの姫です。」と可愛く仕方がない様子。でも、なんどか来られるうちに、発達がかなり遅れているのが気になり始めました。

「発達が少し遅いように思いますが、保健センター等で言われたことはありませんか?」「はい。よく言われます。まあ、ゆっくり ゆっくりですわ」とさほど気にとめている様子もありません。お母さんに、育児休暇中の様子を伺いましたら「眠っていることが多く、横に座って、かわいい寝顔をじーっと見つめていることが多かったです。」というお答えでした。

声掛けしながら手足をのびのびさせたり、体をさすったり、くすぐったり、歌遊びを楽しむという機会がなかったということでしょう。可愛い顔で眠っているわが子をそっとしてやりたい。起こすなんて、お母さんには考えられないことでした。

おしめを替えたり、着かえをしたりする時は、赤ちゃんとの触れ合いを楽しむチャンスなので、どんなふうに触れ合うか、具体的にアドバイスする場はやはり必要なのでしょう。たぶんあるとは思いますがうまくつながらなかったのでしょうか。

でも遅れているのはそれだけではないようにも思えました。障がい児のいらっしゃる保育士のBさんが、「うちの子もこんな感じだったの。だから心配！」と何度もおっしゃるのに押されて、やっぱり早く専門の先生につながらないといけないなあと気があせってきました。

- 11 カ月も半ばを過ぎたというのに、座らせるとフラフラで、どうにかお座りが出来る程度。自分からはできません。
- ハイハイは肘バイで、それも少しだけ。
- 食事の時は、スプーンを持っていくと口は開けますが、なかなか飲み込めず、食品に自分から手をのぼそうとはしません。
- 目を開けていてもどこを見ているのかボーッとしている時間が長く、手足はふにゃふにゃしてやや弛緩状態。
- 本当によく眠る。日中でも6時間ぐらい。夜間もお家でぐっすり眠るそうです。

気付いたことを箇条書きにして専門医あてに手紙を書き、お母さんにお渡ししました。おおらかでのんびりしたお母さんも、少し不安になったのかすぐ受診してくださり、一歳半までは経過をみましようということになったようでした。

いよいよ一歳半になる直前のこと。不思議なことが起きました。「ハハハ！」机につかまり立ちをしていたSちゃんが机の上のおもちゃを投げて大声で笑ったのです。えっ？いま笑った？スタッフ皆、不思議そうに顔を見合わせ聞き耳をたてました。

「ハハハ」Sちゃんがまた笑いしました。Sちゃんが笑っている！！皆大拍手。笑い声を聞いたのは初めてでした。その時を境にSちゃんの成長はめざましいものでした。

**白雪姫が目を覚ましたのです。**

そしてさらに数日後には、つかまり立ちから手を放して一歩を踏み出したのでした。

私たちは個人の成長の幅がこんなにも大きいんだということに驚きをもって学びました。同時に、他の子と比べることなく、ゆっくり、ゆっくり、温かい目でわが子の成長を見守るご両親を眩しく感じたのでした。

